

ロンドン・リッチフィールド・スコットランド

渡 邊 孔 二

ロンドン

わが国に「日本ジョンソン・クラブ」というクラブがあることをご存知だろうか。18世紀のイギリス文学や文化を研究している学者はご存知だろうが、一般にはあまり知られていないかもしれない。設立されて今年で17年ほどになるし、毎年少なくとも一回はクラブ員が集まって研究会や談話会を、日本英文学会全国大会が終了した夕方6時頃から開いている。このクラブで恒例になっていることがひとつだけある。それは研究会や談話会に先立って、このクラブの名称のなかに入っているジョンソンを偲んで、英語で「ドクター・サミュエル・ジョンソンを追悼して」と言いながら、ジョンソンが大好きであったワインではなく、ワインよりも遥かに安い国産ビールで全員が乾杯することである。クラブ員は厳選されたためか、十数名しかいない（「日本ジョンソン協会」という学会の会員は100名を超えている）。しかし毎年の出席率は、病気などでやむなく欠席する者を除いて100パーセントに近く、それがこのクラブの誇りにもなっている。

このクラブは毎年、英文の機関紙を発行しているし、7年前は設立10周年を記念して、東京の「ゆまに書房」という出版社から『サミュエル・ジョンソン百科事典』を出版することになった。これは、有名な18世紀英文学者のパット・ロジャーズが編集した『サミュエル・ジョンソン・エンサイクロペディア』（グリーンウッド・プレス、1996）の翻訳が本体になっているが、それだけで

はない。クラブの中心メンバーになっておられる永嶋大典大阪大学名誉教授が苦勞して纏められた、海外と国内の「ジョンソン研究小史」が付いていて、ジョンソンを研究する学徒には欠かせない事典になっている。この事典が出版されたのは1999年だったが、その数年前にはロンドンに本部がある「ドクター・ジョンソンの家保存委員会」から依頼されて『ドクター・ジョンソンの家』というパンフレットの日本語版をつくっている。この小冊子はロンドンのゴフ・スクエア17番地の、アメリカ産の松材でつくられた四階建ての「ドクター・ジョンソンの家」の一階で販売されている。この「ドクター・ジョンソンの家」の四階部分でジョンソンが例の『ジョンソン英語辞典』（1755）という、英語に関するほとんど最初の本格的な辞書といってよい辞書をほとんど独力で完成させたことはよく知られている。

さて、このクラブ員の全員がすでに何度もイギリスへは渡航経験があるのだが、ぼくのように一人旅の方が多く、誰言うとなく、クラブ員と一緒に「ジョンソン生誕290年祭」に参加しようということになり、1999年9月中旬日本を發った。参加者は、その時点でアメリカ、ヨーロッパなどへの出張の予定があった数名を除いてクラブ員全員であった。

われわれは、ジョンソンの故郷であるミッドランツのリッチフィールドへ行く前にまず、ロンドンのフリート・ストリートのはずれの少し西を北側に進むと見えてくる「ジョンソンの家」に向かった。ここで「保存委員会」の理事会が開かれることになっていたからである。ジョンソンが1746年ごろから1759年3月ごろまで住んでいたこの家も老朽化がすすみ、ハームズワス卿を理事長とする理事会が中心となって、1700年ごろ建てられたこの家をなんとか文化遺産として残そうと頑張っていて、そのときの議題も「どうして維持管理するか」「そのための資金をどう捻出するか」であったが、それに先立って昼食会が理事とわれわれ日本人だけで開かれた。昼食会の場所はなんと、「ジ・オールド・チェシャ・チーズ」であった。このレストランはロンドン大火（1666年）直後に再建された、文字通り古い有名なレストランで、かつてジョンソンや彼の「文学クラブ」のクラブ員であったオリヴァー・ゴールドスミスや、ヴィクトリ

ア時代のチャールズ・ディケンズなどがしばしば食事をしに出かけたレストランである。チーズの好きな方だけでなく、イギリスの歴史や文学に関心がある方々はチェシャという場所に或る種の思い入れがあるだろうが、ぼくはジョナサン・スウィフトとの関係からチェシャには人並み以上の関心がある。しかし昼食中はスウィフトのことなど持ち出さずに軽い話題を優先させて、日本のチーズを宣伝しておいた。理事会のメンバーはハームズワス卿のほかに彼の息子さんと近い将来国会議員になる予定のロバート、それから、一級建築士の某氏、大学教授のA氏、弁護士のB氏、ジョンソン研究家のC氏などであった。昼食会は、時に沈黙を強いられる日本における昼食会とは違って、わいわいがやがや、胃にあまり負担をかけないような話題を楽しみながら続けられた。昼食に費やした時間は二時間ほどであったと記憶している。そのご、午後二時半ごろから理事会が始まった。もっぱら老朽化対策が中心議題だったが、学会とは違って、激しい議論になることもなく、終始なごやかに進行した。理事会は途中でコーヒー・ブレイクをはさんで数時間続けられた。休憩中はコーヒーをいただきながら、ぼくは主にロバートと「これからのイギリス貴族」について話したが、ロバートは「貴族の地位」についてあまり楽観的な見解はもっていなかった。「自分の子供の時代になるとどうなっているのだろうか」と将来への不安をのぞかせていた。

理事会が始まる前からわかっていたことだが、「ドクター・ジョンソンの家」の二階、三階の床がかなり痛んでいて、ぼくが試しに靴で普段より強く床を叩くとすこしへこんだように感じるくらいになっていて、このままだと床が落ちる恐れさえあった。こういう床の補強工事に要する費用は日本円に換算すると5,000万円くらいになるとのことだった。この費用を全世界の方々から出してもらうということになった。われわれ日本ジョンソン・クラブも全面的に協力することを確約したことは言うまでもない。

なお、「ドクター・ジョンソンの家」の一階部分にはジョンソン関係のパンフレット、絵葉書、などの他に、ロンドン関係の地図やイギリス関係の書籍も少しだが展示されている。二階と三階には『ジョンソン英語辞典』の初版や日

本をはじめ世界各国で出版されたジョンソン関係の書籍が置かれている。また、中央の階段踊り場の壁にはジョンソンに関するエピソードに基づく、かなり大きな絵がかけられている。古里を出て50年後、ひとり雨降る古里の市場に黙したまま佇んでいるジョンソンを描いた絵である。本屋を経営していた父親が病気になるため、ジョンソンに「自分の代わりに市場へ行って露店を出してほしい」と頼んだのだが、虚栄心が強く気位も相当高かったジョンソンは露店の店番を嫌がり父親の頼みを拒否した。そのときの自分の卑小さを悔いて、項垂れている絵のなかの彼の姿からは若き日の自分自身に対する痛悔の叫び声が聞こえてきそうである。四階部分についてはすでに述べておいたが、ここは普通屋根裏部屋といわれている。しかしぼくの見るところ、わが国の屋根裏部屋などよりも天井も高いし、ずっと広い。ロンドンへ行く機会に恵まれたときにはぜひこの四階部分へあがってみてください。怠惰を心底嫌悪したジョンソンの肉声が聞こえたような錯覚にしばしのあいだ支配されるかもしれない。

リッチフィールド

ジョンソンを研究している方々の団体は世界各地にかなりあるが、かれの古里にある「ジョンソン協会」が一番古い。1909年から活動してきたと言われている。この協会とリッチフィールド市が主催者になって、「ジョンソン生誕290年祭」が9月18日に開かれることになっていたが、その前夜祭が17日の午後7時ごろからジョンソンの生家で行われ、ぼくも含めて日本人数人が参加した。前夜祭といってもセレモニー的なことはなにもなく、ジョンソンが好きであったワインを飲みながら談笑する、じつにカンファタブルな前夜祭だった。この前夜祭に参加した方々の大半がそのご、近くのパブへ傾れこんだことは決して意外なことではなくごく自然な成り行きであった。

この数年前にリッチフィールドをひとりで訪ねていたぼくはこの、ジョンソンの古里の変貌に驚いた。以前訪ねた時は本当に静かな田舎町だったのだが、数年ぶりに訪ねたときは、静けさを忘れてしまった町にかわっていた。ぼくは

ジョージ・オーウェルの『空気を吸いに』の語り手ジョージ・ボーリングの嘆きを真っ先に思い出していた。ボーリングの場合は二十数年ぶりの古里再訪であったが、ぼくの場合は数年ぶりのジョンソンの古里再訪であった。確かに二つの尖塔のあるリッチフィールド大聖堂やその近くの、ジョンソンがよく散歩した池のまわりの小道、ジョンソンの生家の前にあるスクエアの、彼の小学校時代のエピソードをレリーフにした銅像などは以前と変わってはいなかったのだが、以前と比べると大幅に若者の数が増えており、夜中ともなると、首をしめつけられたのかと聞き間違えるような若い男女の呻き声、叫び声、哄笑、泣き声、などがホテルのぼくの部屋のなかにまで飛び込んできた。ホテルの近くの街路のあちこちにはかれらが残していった汚物、吐き捨てた物、食べ残した物、などが散乱していた。リッチフィールドはこれからどうなっていくのだろうか。ここに残されていた諸問題はリッチフィールドだけの問題ではなく、今ではわが国も含めた全世界に関わる地球規模の問題になっているといえそうである。

翌朝早く町を散歩したときに、或る小さな公園（ビーコン・パーク）の中にある、あの豪華客船タイタニック号の船長をしていたジョン・スミスの銅像の前で、彼の娘さんたちが捧げた花束と手書きのメモを見つけた。そのメモには、「わたしたちはお父さんを誇りに思っています」と書かれていたが、この言葉の背後には、タイタニック号沈没直後の彼に対する数々の非難・攻撃とその後の彼の名誉回復という歴史的な経過が隠されている。彼女たちの心情もまた、数多くの非難された過去をもつ有名人の家族のものであろうし、人間の営為に付き纏う哀しき誤解に属している必然なのかもしれない。

さて、「290年祭」は9月18日（土）の午前11時過ぎから始まった。快晴だった。この、「ドクター・ジョンソン・セレブレーションズ」に参加予定の全員がまず、14世紀に建てられた古色蒼然としたギルドホール（ここにはまだ過去の牢屋らしきものも残されている）に集まったあと、リッチフィールド市長を先頭にマーケット・スクエアまで行進した。ぼく自身は小学校以来の行進だった。このスクエアには言うまでもなくジョンソン像があるのだが、この像の前に市長が花輪を捧げ、そのあと、ユニフォームを着た聖歌隊が聖歌を合唱し、

参加者全員で祈祷を済ませてから全員が再びギルドホールへ戻ったあと、誰彼となく談笑の輪を広げてまずは午前の部終わりということになった。

午後の部は午後7時前から同じギルドホールで始まった。まずはシェリー酒が振舞われた。ぼく自身にはシェリー酒にまつわるいくつかの楽しい思い出があるのだが、そのひとつは、オックスフォード大学のコーパス・クリスティ・コレッジの学長室を訪ねた時の思い出である。当時の学長は有名な歴史学者のキース・トマスさんだった。彼は貴族でもあるのだが、見るからにイギリス紳士然としたトマスさんが、初対面のぼくに向かって発した第一声が、「渡辺さん、何をお飲みになりますか」だった。この一声で、緊張していたぼくの緊張は80パーセントくらい融解してしまい、あとはほんとうに楽しく談笑できた。当時ぼくは、シェリー酒党に入党していたものだから、間髪をいれず「シェリー酒をお願いします」というと、彼は椅子をぐるりと180度回転させて書棚の下からシェリー酒を取り出しご自分でぼく用のグラスに注いでくれた。

ギルドホールでシェリー酒を飲んだ後、ジョンソンがよく食べたと言われているコース料理（メイン・ディッシュはステーキ・アンド・キドニー・プディング）が出てきたが、どうもこの、ジョンソンが好んだ味付けと聞いていたディッシュはぼくの味の好みとは120度くらいちがっていて、当時のジョンソン協会会長のダンズモアさんのスピーチや新会長（1999年）になられた女性小説家のベインブリッジさんの就任演説を聴きながら、ワイン好きだったジョンソンの日常の食事のことをあれこれ夢想していた。

スコットランド

翌日ぼくたちはバーミンガム空港からスコットランドの古い学都グラスゴーの空港までエアークラフトを利用したあと、いよいよジョンソンが馬車で旅行した行程を自動車で辿る旅を始めた。ジョンソンとボズウェルは1773年8月18日にエディンバラを皮切りに11月9日まで旅行を続けるのだが、ぼくたちは数日かけてかれらが旅行した行程の西側だけを辿ることにした。

まずはグラスゴー大学だが、この大学の創設は1451年と古く、あの『ジョンソン伝』を書いたボズウェルもこの大学の学生だったし、ジョンソン自身もスコットランド旅行中にこの大学の哲学教授などと談笑している。さらに付け足すと、夏目漱石がロンドン留学中に取得した唯一の謝礼金（4ポンド4シリング）を出した大学としても知られているが、この謝礼金は「日本人留学生用試験問題出題料」として漱石に渡されたらしい。

グラスゴー大学の側のルートからぼくたちの乗った自動車（運転しているのは言うまでもなくジョンソンクラブ員で、3台に分乗したぼくたちはトランシーバーでお互いに連絡を取りながら進んだが、しばしば連絡が取れないほど互いの車が離れた）はエアシャーに向かった。ここはボズウェルの古里である。彼の生家はいわゆるイギリス風のカントリー・ハウスで威風堂々としているのだが、年月の経過（1755年に建てられた）とともに昔日の面影は薄れてしまっていてかなり荒れていた。（数年前、つまり2001年に改装されて今は建築当時の面影を取り戻し「オーキンレック・ハウス」という名のホテルとしても活用されている。）周りの庭もウィルダernessに支配されていて、自動車を駐車させた場所から空き地まで道なき道を木々の枝を掻き分けながら進んでいたとき、不注意なぼくは小枝に眼鏡を引っ掛けてしまい、下の泥濘に眼鏡を引き込まれて、眼鏡発見にかなりの時間を要してしまった。ボズウェルのこの邸宅はオーキンレックという、エアーのステーションからかなり離れたところにあり、旅行者が訪ねていくにはかなり不便なところだが、ぼくたちは文明の利器の自動車なるものが利用できたのであまり不便は感じなかった。

ぼくたちはここを訪ねた日には、エアーのステーションの真上にある、かなり天井の高いホテルに泊まったのだが、翌日早朝自室に列車の警笛のあの懐かしい音が聞こえてきて、ぼくは思わず鉄道発祥の国イギリスの通時的線と共時的線の交点ともいえるジャンクションに自分が佇んでいるような錯覚を覚えた。この日は早朝からかなりの雨が降っていたが、ぼくはいつもと同じように、ひとりで朝の散歩に出かけ、エアーの海岸を散策した。その帰り道ぼくは自動車に泥水を思い切りかけられてしまった。文明の利器は時に人間に思わぬ復讐を

することがあることを改めて思い知らされた。

エアーはわが国でもかなりよく知られているスコットランドの偉大なる詩人であるロバート・バーンズの古里でもある。「オー・マイ・ラヴズ・ライク・ア・レッド・レッド・ローズ」や「オールド・ラング・サイン」など人口に膾炙されている詩の作者（彼の生誕を祝って毎年1月25日には「バーンズ・ナイト」というイギリスでもかなり有名な祭典が開催される。スコットランドの伝統的な民族衣装を身にまとったバグパイパーの演奏が聴けたり、これまたスコットランドの伝統的な料理である「ハギス」をいただいたり、食後はスコティッシュダンスが見物できたり、バーンズの詩の朗読が聴けることもある。）であるが、若いとき（といっても死んだときも37歳という若さだった）は随分苦労して肉体を酷使したことが知られている。彼の生家はボズウェルの生家の一室よりも狭い農家だったが、今はこの農家は観光客相手の土産物屋らしき店に姿を変えている。（十数年前イギリスの或る港から船でノルウェーに向かっていたとき偶々船上のパーティー会場でスコットランド人と親しくなり雑談をしていて、「バーンズは日本でもよく知られていますよ」というと、「どうしてなんだ」と訊かれ、わが国とバーンズの関係についてしばらく話したことを今懐かしく思い出した。）

エアーからぼくたちはロモンド湖沿いの道を北西に進んでインヴェラレイ城に向かった。この城はキャンベル一族の長を務めたアーガイル公爵の居城で、ジョンソンはスコットランド旅行中にこの城で心温まるもてなしを受けた。この城はファイン湖に面していて、この静かな佇まいの環境に彼も満足したことだろう。

次にぼくたちは西海岸のオーバンに向かった。この町の、ジョンソンとボズウェルが宿泊したインは今ではふたりが泊まったことを記した楕円形のプレートを嵌めてくれているだけで、貸しビルになっているが、ぼくたちがこの場所に辿りついたときにはすでにイーヴニング・グロウイングの時間帯を過ぎていて、このビルの玄関は硬く閉ざされていた。

オーバンは港町ですぐ近くが海なのだが、わが国のふつうの港町と違って、

海岸線がまるで『ガリヴァ旅行記』の舞台のように広々と広がっている。ぼくは、ここがガリヴァの上陸地ではと、あらぬ空想をほしいままにした。スコットランドの有名作家であるサー・ウォルター・スコットにもオーバンのことを歌った詩がいくつかあるがこちらはわが国だけでなくイギリスでもあまり知られていないようだ。

オーバンから、イギリスで一番高い山と言われているベン・ネヴィス（わが国の伊吹山くらいか）の麓を通り、フォート・ウィリアム（文字通りウィリアム3世がつくったフォートつまり砦）を経てイール湖を西に進むとマレイグというフェリーの乗り場に着いたが、ここはスカイ島への入り口のひとつで、ぼくたちは休憩する時間的余裕もなく、大急ぎで切符を買ってフェリーに乗り込んだ。

スカイ島の中心地はポートルーという町で、町全体が海面からかなり高い台地にある。この町はかつてジョンソンたちが歓待されたマクドナルド夫妻の町でもあった。この町でぼくは朝と夜の二回忘れがたい体験をしたのでそのことを簡単に書かせていただく。この町に着いたその夜、ぼくは或るレストランで夕食を食べたのだが、その店から出たときにぼくの眼に飛び込んできた光景をぼくは恐らく忘れることはないだろう。満月が静かな湖面を想わせるような鏡状の海面に写っていて、ぼくはしばし、身動きできない状態で自然美の極致を見ていた。崇高なる自然のつかの間のサーヴィスで、短時間の楽しい饗宴を凌ぐ短時間の幻にも似た天上の絶妙なる音楽が変換装置をくぐって発生させた自然の乱舞だったのかもしれない。かつてウィリアム・サマーセット・モームは或る小説で女性の魅力を、湖面を通り過ぎていく月を用いて描写したことがあったが、もしかするとモームもまた、感動的な湖面上ないしは海面上の月を見た体験を有していたのかもしれない。

こういう体験を夜にしていたぼくは翌朝ひとりでいつものように散歩に出かけたのだが、ホテルの近くの静かな病院の、これまた近くの小高い丘の麓を登って、360度ポートルーが見渡せる場所を見つけた。快晴の朝の清清しさを浴びてポートルーは輝いていた。この町の名前のなかにあるルーとは王様の意だが、

歴史的事実を別にしても、まさしくこの小さな町は王者然としていた。

ところで、最近、スカイ島の東側とブリテン本島を結ぶ橋ができて便利になっており、ぼくたちもこの橋を渡って、ケルト時代からの古城であるイーレン城、さらには、ぼくが秘蔵している（かなり高価な）「湖面の浮島に佇む小さな古城キルハーン」（ギルバート・ブラウンのエッチング）の絵そっくりの古城が眼前に現れてくる小さな湖がいくつも点在している地域を過ぎ、ネス湖の南側に出た。ここからは、今は、湖の西側を走る広い道路と東側を走るかなり狭い道路の二本の道がインヴァネスまで続いているのだが、ぼくたちは、ジョンソンたちが（馬に乗って）通った東側の狭い道を（自動車）で通ってインヴァネスに辿り着いた。

インヴァネスとは文字通り「ネス河の河口」の意だが、ここもまた、ぼくには思い出深い場所である。もちろん、シェイクスピアに関心がある方にとっては、ここは『マクベス』の舞台のモデルになった古城のある場所であり、また、18世紀の歴史に関心のある方にとっては、「ボニー・プリンス」つまり、チャールズ・エドワード・スチュアートの砦になった城でもあり、文学的歴史的記憶のなかに入り込んでいる。しかしぼくの個人的記憶のなかのインヴァネスは、昔気質の「ビービー」のおやじさんと親切なイタリア人夫妻と強く結びついている。1990年頃だったと記憶しているが、ぼくはいつもと同じように、一人旅を楽しみながらインヴァネスに辿り着き、その夜泊まるところを歩きながら探した。多くの「ビービー」（ベッド・アンド・ブレックファースト）のなかから、庭のきれいな一軒を選んだ。実に静かで清潔で、もし時間的余裕さえあれば一週間くらい泊まりたかったほどの「ビービー」で、ぼくは大いに気に入った。しかしその夜はかなり疲れていて、夕食のときに注文したワイン一本が飲み干せず、半分くらい残してしまった。翌日勘定をしてもらおうと、昨夜のワイン代が請求書のなかに入っていない。ぼくはその請求書を見るとすぐ、おやじさんに「ワイン代」のことを言った。それにたいして、おやじさんは「ワインがあなたのお口には合わなかったようですね。あなたはあまり飲んでいないのだから、ワイン代はいただけません」とはっきりおっしゃった。ぼくは昨夜の

自分の体調のことを話し、ワイン代を取ってくれるように頼んだがおやじさんは頑としてぼくの頼みをきこうとしなかった。それで、ぼくは、こんなささやかな提案をした。「ぼくはワイン代を取ってもらわないとここを去ることができない。だから、取ってほしい。その代金をどう使うかはあなたに任されているのですが、ぼくの希望はその代金の全部ないしは一部を使ってぼくになにか記念のスーヴニアを買っていただきたい。」これでやっとおやじさんはワイン代を取ってくれることになり、ぼくはなかなかしゃれたペンをいただけることになった。

そういう思い出のあるおやじさんの経営しておられた「ビービー」を10年ぶりに訪ねようと雨のなかをひとりそこへ行ってみたのだが、もうその「ビービー」は姿を消していた。

この「ビービー」には寛げる広間があり、夕食後は、おやじさん自らお茶を入れてぼくのような旅人をもてなしてくれたのだが、そのときは、イタリア人夫妻とぼくの三人だけが宿泊客で、その夜も翌朝もぼくたちはまるで久しぶりに集まった遠縁の人たちのようにお互い遠慮勝ちに談笑した。イタリア人ご夫妻は結婚10年の記念旅行中で、自動車でイタリアのボローニャを出発して、ゆっくりのんびりブリテン島を北上してこれからスカイ島へ行くとその夜おっしゃっていた。ところが、翌朝、思いがけず、ぼくに「よろしかったら、スカイ島へご一緒しませんか」と言ってくれた。ぼくはほんとうに嬉しく、「お願いします」と言いたかったのだが、その日の夜ロンドンで或る人と会う約束をすでにしていて、この素晴らしいお誘いを断らざるをえなかった。お断りすると、ご夫妻は「それではネス湖のほitoriだけでもドライブしましょうか」とおっしゃってくれ、数時間ドライブを楽しむことができた。途中で、写真も取ってくれ、この写真はのちほど日本へ送ってくれた。ぼくはイタリア人にこれで、少なくとも二回親切にしてもらったことになるが、一回目の親切については、拙著『楽書き紀行』（新風舎）の47-48頁に書いたのでここでは割愛させていただく。ジョンソンはインヴァネスで買い求めた或る本を或る若い女性にプレゼントするという親切心を発揮したそうだが、ぼく自身はインヴァネスでおやじさんと

イタリア人夫妻という三人から「人の温もり」という贈り物をいただいた。

インヴァネスからぼくたちは、ジョンソンとボズウェルのスコットランド旅行の出発地であったエディンバラへと向かうことになったが、その途中にピットロックリー（スコットランド古来のゲール語で「石の多い村」という意味で、地元の人々はピットロックホリと発音していた。夏目漱石はピトロクリと書いている）でしばし、漱石ゆかりの場所や風光明媚な場所を訪ねることにした。

まずは、今はホテルになっている（1935年から）が、かつては醸造にかかわっていた裕福な実業家で親日家でもあった方の邸宅であった場所へ行った。ここは、もしかすると、漱石がイギリス滞在中に安らぎを感じることができた唯一の場所だったかもしれない。「ピトロクリの谷は秋の真下にある」（「永日小品」）とのちほど彼が描いたこの場所はイギリスにおける漱石にとっては「秋の心地よさ」に似た精神的ヨナの鯨ならぬカンファタブル・デンであったのかもしれない。恐らく日本人でピットロックリーを最も早く訪れたのは岩倉具視や久米邦武など、つまり『米欧回覧実記』の筆者たちただだろう。漱石が訪れたのと同じ頃（しかしそれは彼よりも30年前の同じ夕刻）のことを「暮煙暝して、星光点々たり、天清く野広にして、涼風の肌を侵すは、都府の陰霧蒙蒙たる気色に非ず、多日の紅塵を一掃して、頓に潔きを覚ふ」（読みやすくするために片仮名を平仮名にして、漢字を少し変えました。久米氏よ、許し給え）と書いている。どちらも秋の夕刻の美しさを感動を込めて述べているのだが、漱石の場合は、かなりバックグラウンドに複雑さが隠されているように読める。というのも、漱石は「ピトロクリの谷は・・・」のあと、自然美を歌い上げてから、「酸いものがいつの間にか甘くなる様に、谷全体に時代が附く。ピトロクリの谷は、此の時百年の昔、二百年の昔にかえって、安々と寂びて仕舞う。」と書いているからである。さらに、こう結んでいるからである。「主人は横を振り向いて、ピトロクリの明るい谷を指差した。黒い河は依然として其の真ん中を流れている。あの河を一里半北へ遡るとキリ克蘭キーの峽間があると云った。高地人と低地人とキリ克蘭キーの峽間で戦った時、屍が岩の間に挟まって、岩を打つ水を塞いだ。高地人と低地人の血を飲んだ河の流れは色を変えて三日

の間ピトロクリの谷を通った。自分は明日早朝キリクランキーの古戦場を訪おうと決心した。崖から出たら足の下に美しい薔薇の花弁が二三片散っていた。」ここに出てくる時代、屍、血、落花などの通時的共時的イメージは、「倫敦に住み暮らしたる二年は尤も不愉快の二年なり」（『文学論』）と漱石が断言したイギリス留学中の彼の苦悩とどこかで結びついているのではあるまいか。20世紀になったばかりの、世界で最も近代文明国であることを誇っていたイギリスへの文部省派遣の第一期留学生になった明治の日本人の彼が異質ゆえの不安と懐疑に苛まれながら（たとえば『草枕』結末部の文明論を思い出してください）、それでも後戻りできないつらさに抵抗しつつ暗がりを探索する心情を形を変えて描いているのではあるまいか。しかしこの体験が彼の場合、作家として結実したわけで、二年間に亘るロンドンの不愉快と二週間に亘るスコットランドの安らぎが漱石自身の言う「人生の苦を忘れて、慰藉するといふ意味の小説」（『文章世界』）である『草枕』にも『坊っちゃん』にも、微かな隠し味のように組み込まれている、とみなすのはぼくだけのとんでもない見当はずれなのだろうか。漱石を歓待したジョン・ヘンリ・ディクソンは、『草枕』に詩人の画家を登場させた漱石同様日本の水彩画が好きだったし、『坊っちゃん』に出てくる山嵐や清はスコットランドに対する漱石のイメージそのものではないだろうか。

ピットロックリーから少し車を走らせると、タミル湖が見渡せる、なかなか素晴らしい眺望の「クイーンズ・ビュー」という場所に出る。もちろん、ここもジョンソンが訪ねた場所ではないのだが、折角ここまで来たのだから、見よう、ということになった。どうしてクイーンが付いているのかについては、ヴィクトリア女王がここをわざわざ訪ねたから、とか、中世の女王が関係している、といった説があるようだが、よくわからない。しかし眺めは抜群で、近くの滝の激しさとは対照的に、あくまでも静謐そのものを想わせる風景美で、わが国ならさしずめ、鷺羽山の頂上から眺める、穏やかな秋の日の島島の点在した瀬戸内海に少し似ているようである。

ジョンソンとボズウェルが3ヶ月ばかりかけて旅した行程の一部をぼくたち

は5日間で回ったことになるが、ぼくたちの旅の終わりはジョンソンたちの出発地のエディンバラで、ここは日本人にもよく知られているスコットランド最大の都市であり、ここに関しては、ジョンソン同様、「非常に有名な都市なので、改めて述べるまでもない」と書いておいたほうがよさそうである。ぼくたちは、これまたエディンバラで最も有名な「プリンセス・ストリート」の或る場所で、ジョンソンが好んで飲んだワインを飲みながら、今回のスコットランド旅行のことどもを語り合った。

(2005年5月31日受理, 7月27日採択)